

R・D・コリソン・ブラック

## アダム・スミスとアイアランド（下）

上  
野  
格

『国富論』第五編第三章でスミスはイギリスの主要な租税を帝国の各地方に課す方法とアイアランドの場合は困難を最少にする方法とを詳細に論じている。これは当時のアイアランド「愛国者達」には歓迎されそうにない見解であった。彼は帝国の各地方への代表なき課税を提唱したのではなかった。帝国の各地方は代表を選出し帝国議会に送りこむ権利を有するとされた。この措置に、スミスは、アイアランドへの実質的な利益を予測していたのである。「大ブリテンと合邦すれば、アイアランドは貿易の自由に加えて、それよりずっと重要な他のいろいろの利益をも得ることになろうし、しかもこの利益は、合邦にともなうとみられる租税のいかなる増加をも償って、はるかに余りあるものとなるだろう。かつてイングランドと合邦したことによって、スコットランドの中流階級と下層階級の人々は、それまでいつもかれらを抑圧してやまなかつた貴族の権力から、まったく解放された。

アダム・スミスとアイアランド（下）

大ブリテンと合邦すれば、アイルランドのあらゆる階級の人々の大部分は、スコットランドにおけるよりはるかに抑圧的な貴族制から、同じように完全に解放されよう。アイルランドの貴族制たるや、スコットランドのそれのように、生れと財産という、自然で尊重すべき差別にもとづくのではなしに、宗教的および政治的な偏見という、あらゆる差別のなかでも、もっとも鼻もぢならない差別にもとづいている。こういう差別は、他のいかなる差別にもまして、抑圧する側の不遜と抑圧される側の憎悪と憤激をともにかき立て、たいてい、そのあげくは、同じ国の住民同士でありながら、異国の住民間でもかつてなかったほど、互いに敵視させ合うものである。大ブリテンと合邦しないとすれば、アイルランドの住民は、何世代たうと、みずからを一つの国民と考えるようにはなりそうもない。<sup>(36)</sup>」

一七七九年のダンダスとカーライルへのスミスの助言には、この帝国合邦への言及はないが、彼がこの考えを捨てたと信ずる理由は見当らない。『アメリカとの抗争の状態に関する考察、一七七八年二月』の中でスミスは「わが諸植民地との立憲的合邦計画」に言及し、これを「あちらこちらの、私に似た孤独な思索家を除けば、一人として弁護人を見出すことの出来そうにない」<sup>(37)</sup>代物と述べている。こうしたわけで、彼は、これを、「実施されれば、帝国の繁栄、栄光、永続に対して間違いなく非常な貢献をする」と考えながら、思索家としてではなく、政権を担当する政治家たちへの助言者として執筆するときには、これにはまず言及することがなかったのである。

帝国合邦は一七七六年または一七七九年にはスミス自身にさえ実地的な解決策とは思えなかったようであるが、アメリカとの紛争の結果ピットとその閣僚たちはアイアランドと大ブリテンの二王国の合邦が政治的にも戦

略的にも必要であるという考えに次第に傾いて行つた。ピットが腹をきめたのは間違ひなく一七九八年のことである。そのような方法は一七八五年には実際的な政策とは考えられなかったが、当時、ピットが試みようとした「帝国の一構成員としてのアイアランドの地位の総合的な調整」<sup>(38)</sup>はスミスの提案に多くの点で似通っていた。通商の完全な自由がイギリス大蔵省へのアイアランドの納付金で埋め合わされるという基本的な特徴が存在したのであって、それは、たとえピットが合邦を提唱することによってアイアランドの新たに見出した立法上の独立に干渉するなどということを敢えてしなかったとしても、同じなのである。

ピットのこの政策は既に前からシェルバーンが展開し論じていたものであった。<sup>(39)</sup>ピットとシェルバーンが共に自分たちをスミスの「学生」と考えていたという限りでなら、スミスの考えが彼らに影響を与えたと言うこともできよう、しかし、ピットが、アイアランドへの一七八五年提案についてスミスに相談したという証拠はなく、普通は、ジョサイア・タッカー<sup>(40)</sup>の著作からこの提案を思いついたと了解されているのである。同じように、しかし、この提案がスミスには認められたらうということを疑う理由も見当らない。ジョサイア・ウェッジウッドに導かれてイングランドの製造業者たちが組織されピットの計画に反対したとき、スミスはラ・ロシュフコーに次のように書いている。「私はこの国の各地に設けられている商工会議所がよくない結果を生むように予想しております。そのことは閣下も予測しておられるようにお見うけいたします。喧騒がいつも政府を脅迫し徒党が屢々政府に圧力をかける国では、商業の規制は普通、公衆を欺きそれにつけこむことで最も得をする者どもの思いのままなのです」<sup>(41)</sup>。

製造業者たちが政府脅迫に用いているこの騒ぎは、事実、主にウィリアム・イーデンの指導によるものであつ

たーダダスを通して一七七九年にアイアランドとの自由貿易に有利な意見をスミスに求めてきたのと同人物である。一七七九年から一七八五年にかけての政治的動乱によって失脚したイーデンが、今度は自由貿易反対を最大限に利用して注目を集め影響力をとりもどそうとするなどというのは、スミスにとって別に驚くほどのことではなかったろう。スミスがはるかに驚きもし苦痛にも感じたにちがいないのは、古いアイアランドの友人エドマンド・バークもまたピットの交易提案への反対派に連なっていたことである。「バークは次第に名声を失っていたが、この問題で彼の演じた役割のため更にひどい打撃をうけた。一七七八年と一七七九年に彼のとった立場と逆の立場を今回とるについては同志もいたのだが、彼がアイアランド生れであり、前回同じ問題で彼が非常に熱心であったために、彼だけが特に攻撃的になったのである」<sup>(42)</sup>。バークのこの政治行動は、この場合スミスが屢々嘆くあの「ただの徒党」<sup>(43)</sup>に非常に近く、スミスは驚いたかもしれないが、そのことが二人の友情を損うことはなかった。ピットの提案したアイアランドとの総合的解決策が敗れて一年ばかりの頃、バークはスミスに、従弟のウィリアム・バークのことをインド総督秘書官アレクサンダー・ロスにとりなしてくるよう依頼する手紙を出した。スミスは即座にこの要請に応じているのである<sup>(44)</sup>。こうしたことからわかることは、「スミスの場合彼を書くものは殆んど『教授』または『思索家』の精神に貫かれていて、政治家が多少とも拘束されざるをえない内外からの諸制約条件など殆んど顧慮することがない」<sup>(45)</sup>けれども、この精神を、思索家と言うよりは政治家として行動する友人との個人的な関係にまで貫こうとはしていないことは明らかだということである。

イギリスとアイアランドの合邦が制定されたのはスミスの没後であった。合邦は一二〇年間続いたが、アイアランドの住民たちをして自分たちは一つの国民だと考えさせるようにはならず、また、スミスが合邦から予測していた多くの他の利益も生じたわけではなかった。アイアランドがこの措置の適用をうけて半世紀の経験をつんだ一八五〇年までには、合邦と自由貿易は殆んどアイアランド人にとって非難の対象になり、保護の思想が民族主義的な人びとにますます歓迎されるようになった。

スミスは何故合邦にあれほど多くを期待したのだろうか、また、何故彼の判断はアイアランドの場合あれほど甚だしくずれてしまったのだろうか。前にも触れたように、スミスがイギリスとアイアランドの合邦を当時のイギリス帝国の諸困難を解決する一大構想の一部分と見ていたことは確かである。しかし、また、彼が、合邦を、スコットランドの民衆が一七〇七年の合邦から得た諸利益をアイアランドの民衆にもたらす可能性のあるものと見ていたことも確かなのである。「合邦は、それから無限の利益<sup>(47)</sup>がこの国にもたらされる方策です」とスミスは出版人のウイリアム・ストラハンに一七六〇年に書いているが、続けてこうつけ加えている、「しかし、この利益の見込は遠い将来のもので、また、甚だ不確かに見えるにちがいありません<sup>(48)</sup>」と。

スミスは、イングランドとの合邦後五〇年でそれが利益をもたらしたと考える点で、かなり典型的なスコットランド人であった。かなりの程度、この利益というのは経済上のものであったが、経済的進歩それ自体は合邦から直接生じたわけではなかった。R・H・キャンベル教授が述べているように、「この合邦は経済成長を助けはしたが引おこしたわけではない。経済成長がこの合邦を追認させたのである<sup>(49)</sup>」。しかしながら、スミス自身の国が合邦から利益をえたようにアイアランドも合邦から利益をえよう、とスミスが予想したのは別に不自然なこと

ではない。スコットランドにおいては合邦のあと経済が発達し、アイアランドにおいては合邦のあと経済が衰退したことは事実であるが、アイアランドにおいても、スコットランドにおけると同様、後者は必ずしも前者の結果ではないのである。近代アイアランド史家たちの中では、合邦から大飢饉までのアイアランドの経済的衰退が工業技術と人口の変化の結果であって、合邦という事実そのものとは結びついていないという見解が有力になってきている。<sup>(48)</sup> そうではあるが、スコットランドでは経済成長が合邦を迫認させ、アイアランドでは経済衰退が合邦に異議をとねえさせた、と言うのが(スミスに対して)公平なように思える。

こうして、民族主義が一九世紀中葉にアイアランドにおいて新たな力を見出したこと、また、民族主義者たちがアダム・スミスの理論よりもフリードリッヒ・リストのそれにより多くの魅力を感じたことは当然のことである。<sup>(49)</sup> だが、一九世紀アイアランドの政治・経済文献の中に自由貿易とレッセ・フェールに対する攻撃が多くありながら、スミスの著述に対する直接の攻撃は殆んどない、ということは注目値する。攻撃されたのは多くが古典理論の劣悪な改訂版であった。またもや当然のことながら、これらは恰好の標的だったのである。

一九世紀の著述家の一人、J・ゴトキン師は、合邦がアイアランドにもたらしそうな政治的利益についてスミスの述べたところを、それに関するJ・R・マカロックの一八二八年の樂觀的なコメントと合わせて引用している――「一八〇一年に発効したアイアランドの合邦はこれまでのところこの国の民衆をスミス博士の言う抑圧的で狭量な貴族階級からただ部分的に解放したにすぎないが、合邦はこの望ましい結果の完遂への道を既に開いている」。

ゴトキンは次のように述べている、「これはおこるであろうが、私にはどのようにして生ずるか本当のところ

はわからない。たしかに、四四年にわたる試みは、この方向ではさしたる成果をあげてこなかった<sup>(51)</sup>。合邦がアイアランドにもたらすとスミスの期待した諸利益が実現しなかった主な理由のうちの 하나가、疑いもなく、ここにある。この合邦のあと経済衰退が生じたばかりでなく、合邦は、スミスの予想した政治的社会的環境の改善を生み出すことも出来なかったのである。スコットランドでは、合邦のあと、地主たちは農業改善の過程で卓越した役割を果たした。彼らのエネルギーが政治から転じたためである。しかし、アイアランドではこうした好ましい事態は再現されなかったのである。

「大ブリテンと合邦すれば、アイルランドのあらゆる階級の人々の大部分は、はるかに抑圧的な貴族制から、同じように完全に解放されよう」というスミスの期待については既に言及しておいた。彼がここで心に描いていたらしいことは、地主階級の除去ではなく、支配階級の権力の終息である。これは少数ながら強力な集団で、バークは(その)「市民的特権を排他的に自分たちだけで独占しようとするプロテスタントのごく一部の利己的で派閥的な企図<sup>(52)</sup>」を見抜いている。この点(支配階級の権力の終息)についてのスミスの期待が幻影に基くものではないことは、アイアランド・プロテスタント支配階級の多くが、合邦は、選挙区を食いものにし任命権を切売りする自分たちの権力を終らせてしまおうと予見して、強くこれに反対したという事実によって証明されている。

これ(改善)はかなりの程度まで行なわれた、しかし、地主貴族階級と他の諸階級の間、経済的社会的または政治的諸関係の全般的改善がそれに続いたわけではなかった。一八一五年以後の穀物価格の下落とともに、農業改善へのアイアランド地主の関心は衰え、多くの者は投資を切つめることで自分たちの生活水準を維持しようとした<sup>(53)</sup>。同時に、この国の大部分における、主としてプロテスタントからなる地主と主にカトリックの小作人との

間の分裂はカトリック解放が長く引きのばされたため、また、後には合邦それ自体の廃棄を求める運動のため、少しも軽減されなかった。

スミス自身が、そうした社会的政治的分裂の存在する限り、自由貿易経済において自己の利益を個々人が追求することから生ずると自分の示唆した経済の改善は望むべくもないことを認める最初の一人であったことであろう。何故なら、スミスが『国富論』で詳説した政治経済学体系は、その背景に、彼が『道徳感情論』と一七六三年の正義に関する講義で展開した倫理学と法学の体系をおいていることは常に思いおこされねばならぬからである。この体系において、正義は他の何をおいても不可欠である——これは、自然の自由の体系の「全建築物を支える大黒柱」である。正義と博愛とともに欠く社会においては、「人民のための豊富な生活資料」は達成されようがないとスミスは主張するであろう、そして、確かに、大飢饉以前のアイアランドの大部分について、これらのことはすべて真実なのである。

しかし、アイアランド史家たちの新しい世代がわれわれに覚えておくよう教えてくれている重要な事柄の一つは、一九世紀アイアランドの一部分について真なることが、必ずしも他の部分について真であるとは限らない、ということである。特に、南部および西部の主として農業の経済と、北部および東部の商工業経済の間には重要な相違が存在した。後者の地域では、合邦以後の事態は、かなり、スミスの予言した線に添って推移した。アルスターの農民にとって、小作権は他地域よりかなり安定しており、これが農業発展の確固とした基礎をなした。また、北部で長い間農業収入の補いとして役立ってきた家内工業が衰退しはじめた頃、ベルファストに育ちはじめた工場で、工業への雇用機会が新しく生じた。ベルファストのロバート・ジョイがスコットランド訪問の間に



ハーグリーヴズとアークライトの新式木綿紡績機械を見て、故郷の町にそれを導入しようと決めたのは、偶然にも、『国富論』刊行の翌年であつた。<sup>(54)</sup>しかし、ベルファストの工業化が実際に開始されたのは合邦の後であつた。一八二〇年代における、機械工業としてのリンネル工業の近代化成功とともに、輸出用繊維業の将来が確実になつた。この基礎の上に、同世紀の後半、機械工業と造船業が加わり、ベルファストはグラスゴーと並ぶすっかりした工業都市になるのである。

燃料と原料を輸入に頼り、輸出市場に依存しているため、アルスターの工業雇用主と労働者は、当然のことながら、合邦と自由貿易に好意的で、南部の隣人たちの保護主義的思想が抬頭してきた時、それには殆んど目もくれなかつた。だが、圧倒的多数のアルスター人たちに合邦を支持させた理由は、単に経済的なものばかりではなく、政治的なものでもあつて、その起源は、一七七九年にスミスを悩ましたプロテスタントとカトリック信徒の分裂にあつた。しかし、ここには、カトリック信徒とプロテスタントというだけではなく、また、アイアランド国教会の信徒とプレスビテリアンおよび他の非国教徒という二重の差別が存在することまでスミスが細かく識別していたようには見えない。この差別は一七七六年には第一級の重要性をもつたものではなかつたが、後年次第に意義をましてきたのである。一八世紀後半に、アイアランドの非国教プロテスタンティズムの本拠地であつたアルスターはまた急進主義の中心地にもなつた。「ベルファストとその近隣において、ペインの『人間の権利』は非常に普及し、ウルフトーンは自分の新聞にそれをベルフェスク（ベルファスト）のコーランと書いた。そのような見解に固執することが、間もなく不可避的に、北部の指導者たちをも巻きこんで、彼らはこの地方で大事にされてきたプロテスタンティズムと全く矛盾する事柄を認めるにいたつた。人間の平等な諸権利を主張しな

がら、同時に、嫌いな信仰の告白者たちに気ままな制約を押しつけることは不可能である<sup>(55)</sup>。しかし一七九五年頃から後、フランス軍の侵入への恐れと、圧倒的にカトリックの国でのプロテスタントの価値と財産の安全についての心配が、アルスター・プロテスタントの意見を急進主義から保守主義へと転向させ、ますます、彼らの救いを合邦に見出すようにさせてしまった。

こうして、歴史の展開は、スミスがイギリスとアイアランドの合邦に続いておこると期待したところとは、奇妙に、また興味深く、相違する状況を生み出したのであった。地主と小作人という古くからの分裂とは別に、アイアランド人民の「中・下層階級」の中に別の分裂が進行した、それは、南部の主にカトリックの農民や農業労働者の人口と、北部の主にプロテスタントの製造業者と工業労働者の人口とである。これは新たな境界線を作り、アイアランドの住民たちに、自分たちを一つの民族と考えることを妨げたし、今もなお妨げている。

合邦それ自体が、一方では経済的進歩を生み、他方では経済的衰退を生みだした人口と工業技術のあの諸変化の原因ではなかったのと正に同じく、そうした進歩や衰退と南北の宗教的背景との間にも何の因果関係も存在しなかったように見える。一八四一年には、アイアランドの舟大工の四〇%はマンスターに住んでおり、アイアランドの最初の外輪船は一八一二年にコークで建造された<sup>(56)</sup>。こうした事実に照してみると、もしも、アイアランドで近代造船技術を発達させた企業家エドワード・ハーランドが、一八五四年にベルファストへではなくコークに造船所支配人としてやってきたら、この国の歴史はどうなっていたらうかと推測するのは興味のあるところである。

どのようなことになっていたにせよ、合邦下のアイアランドにおける経済的变化は、政治的宗教的分裂を強め

こそそれらげはしなかったというのが事実である。一九世紀が経過するにつれて、ますます、一つのアイアランドでは民族主義と保護主義が尊重さるべき、普遍的価値であり、他のアイアランドではユニオニズムと自由貿易が受入れられるという事態が生じた。この諸結果は二〇世紀前半を通して継続した。これは、一八七〇年から一九〇二年の時期の土地法によって強められたもので、この法律は、スミスの語法に従えば社会的正義の改善と見られるかもしれないが、経済成長にはあまり適合しない制度的構造を生み出したものであった。しかし、一九五八年以降の時期には、もう一度、特にアイアランド共和国において、価値の転換があった。経済成長が積極的に求められ、より開放的な経済の下で輸出産業の発達によってその達成が計られた。この経済はより広い経済的共同体の一部をなすものであった—アダム・スミスが二世紀前に促進しようとしたものとおそらくあまり違わぬ方法であろう。

こうして、われわれは、アダム・スミスの思想の糸がアイアランドの諸問題という織物に入ったり出たりしながら、縫うように進んできたことを知る。時には拒否され、時には尊重されたが、しかし、全体として、アイアランド内外のどの思想史研究者が理解するよりもっと重要な意義を、（スミスの思想は）アイアランドの諸問題の中で持っているのである。

(36) *Wealth of Nations*, II, 944. 大河内監訳『国富論』、中央文庫、第三分冊、四三四—五ページ。

スミスは同様の指摘をカーライル伯への一七七九年十一月八日付の手紙でも行なっている。アイアランドが石炭と鉄を欠くため、アイアランド工業がイギリス市場で競争できるようになるまでには長い時間がかかろう、と述べたあとで、彼はこう付け加えている「下層階級の人民を保護し規制するには、それは秩序、治政、および正義の規律  
アダム・スミスとアイアランド（下）

メダム・スミスとハイランズ (下)

正しい施行を欠いています。これらの事柄は、工業の進歩にとって、石炭や木材を合せたよりもっと基本的に重要であって、ハイランズが二つの敵対的な国民、つまり抑圧者と被抑圧者、プロテスタントとカトリック信徒に分裂し続ける限り、これらの事柄は欠けたまじむべきでなければならないのであつた。」(Rae, op. cit., p. 351)

- (37) "Smith's Thoughts on the State of the Contest with America, February 1778", *Correspondence*, Appendix B, p. 382.
- (38) Harlow, *Founding of the Second British Empire*, Vol I, p. 564.
- (39) *ibid*, pp. 544-9.
- (40) Cf. Kirk Willis, op. cit., p. 537.
- (41) Smith to Le Duc de la Rochefoucauld, 1 November 1785, *Correspondence*, p. 286.
- (42) Thomas H. D. Mahoney, *Edmund Burke and Ireland*, Cambridge, Mass., 1960, pp. 148-9.
- (43) Cf. Winch, op. cit., p. 160.
- (44) Burke to Smith, 7 December 1786; Smith to Alexander Ross, 13 December 1786, *Correspondence*, pp. 297-300.
- (45) J. Viner, *Guide to John Rae's Life of Adam Smith*, New York, 1965, p. 24.
- (46) Adam Smith to William Strahan, 4 April 1760, *Correspondence*, p. 68.
- (47) R. H. Campbell, "The Union and Economic Growth", *The Union of 1707*, ed. T. J. Rae, Glasgow, 1974.
- (48) Cf. I. M. Cullen, *An Economic History of Ireland since 1660*, London, 1972, pp. 104-6.
- (49) ハイランズ民族主義者たちの経済思想の素朴なところについては参考文献を参照せよ。

R. D. Collison Black, "The Irish Experience in Relation to the Theory and Policy of Economic Development",

- A. J. Youngson (ed.), *Economic Development in the Long Run*, London, 1971, pp. 200-205.
- (96) 同書 pp. 17-18.
- (15) J. Godkin, *The Rights of Ireland*, Repeal Prize Essay, Dublin, 1845, p. 130.
- (26) F. O'Gorman, *Edmund Burke, his Political Philosophy*, London, 1973, p. 89.  
 この私の解釈は甲南大学の杉原四郎教授との文通に啓発されたものである。杉原教授はスミスが「スコットランドの中・下層階級の人民とアイアランドの全階級の人民」の間においた区別を強調しておられる。
- (33) Cf. Cullen, op. cit., p. 115, スコットランドについて R. H. Campbell 参照。
- (45) E. R. R. Green, "Early Industrial Belfast", *Belfast: the Origin and Growth of an Industrial City*, London, 1967, p. 79.
- (53) C. Litton Falkiner, "The Grattan Parliament and Ulster", *Studies in Irish History*, London, 1902, p. 35.
- (56) Cullen, op. cit., p. 124.